令和４年度　第２回　高山市総合教育会議　　議事録

【日　時】　令和５年３月１４日（火）　１５時～１７時

【場　所】　高山市役所　４階　特別会議室

【出席者】（構成員）

高山市長	田中　明
教育長	中野谷　康司
教育長職務代理者	長瀬　信
教育委員	野崎　加代子
教育委員	白田　美樹
教育委員	桑谷　康弘
教育委員	丸山　千絵

（構成員以外の出席者）
企画部長、教育委員会事務局長、市民活動部長、市民保健部長、福祉部長、商工労働部長、企画課長、教育総務課長、学校教育課長、文化財課長、子育て支援課長、子育て発達支援センター長、企画課係長、企画課係員

【会議内容（次第）】
・市長あいさつ
・教育長あいさつ
・議題
（１）教育大綱の推進に向けた取組みについて　資料１
（２）聴覚障がいのある幼児への支援について　資料２
（３）部活動の地域移行について　資料３
（４）その他　※非公開

【議事要旨】

企画部長　それでは、議題に入ります。高山市総合教育会議運営規程第３条の規定により、議長は市長が務めることとしていますので、進行を田中市長にお願いします。

市長　議題（１）教育大綱の推進に向けた取組みについて、事務局から説明をお願いします。

企画課長　（資料１を説明）

市長　ただいまの内容について、質問等がありましたらお願いします。

長瀬委員　１１ページ６８番の高校連携の推進について、取り組んでいただきありがとうございます。ただし、特別支援学校もありますので、高特連携または高校等連携とした方が良いと思いました。また、成果に「高校生の考えを施策に反映したり、高校生と一緒に施策を進めることができた」とあります

が、一緒にという捉え方は大切な考えだと思います。高校生とともに施策を進めていくことは、地域の活性化に繋がると前々から思っていますので、共にという捉え方を大事にしていただければありがたいと思います。また、取組みの内容に議会と高校生との意見交換会とありますが、私も以前見学させていただいたこともありますし、以前からこの取組みについて承知していますが、小学生や中学生、高校生など、幅広い年齢層の声を聞くという取組みを検討していくことはどうかと思っていますが、考えを聞かせてください。

市長　小学生、中学生、高校生の様々な思いというのは大切だと思っていますし、自分たちが提案したことが形として出てくるということは達成感といいますか、一緒にやっているという気持ちにも繋がります。若者のワクワク感やこの地域に生まれてよかったとか、何か貢献できるといった実感できるようなものについて、一緒に施策を進めていきたいと考えています。また、市長に就任してから小学校、中学校に訪ねてお話を聞いておりますが、地元の伝統や自然を大切にしたいと思う一方、日頃の生活の中で大型の商業施設があったら良いというような、何か新しいものがあると楽しく過ごせるということも聞いております。そういった思いをできるだけ実現できるようなアプローチの仕方をこれまで以上に意識してやっていきたいと思います。

教育委員会事務局長　議会と高校生との意見交換について、小中学校へも広げてほしいというご意見は以前よりいただいていたため、一昨年ぐらいから議員の皆さんに学校に足を運んでいただき、子どもたちの生の姿を見ていただく機会を作ってきました。意見交換や子どもたちが願うことを聞き取りできるような機会を作ることについては、全市の小学校を一堂に会してということは困難な部分もあるかもしれませんが、可能であれば実施したいと思いますし、手法を検討しながら進めていきたいと思います。

野崎委員　２点教えてください。３ページの１７番の新規事業について、子育て前の出産から子育てまで様々な相談に応じ必要な支援に繋ぐ伴走型支援と経済的な支援を一体として実施とありますが、妊娠・出産ということを、コロナ禍で控えてしまうような不安等がありましたので、伴走型相談支援というものを具体的にどのように実施されるか教えてください。
また、５ページの２６番について、ファミリーサポート事業やＳＮＳを使った相談事業が増えているということですが、今は祖父母と一緒に暮らすということが割と少ないこともあり、お父さんやお母さんは子育てに対して様々なことが心配になっていると思います。相談業務について詳しい内容を教えてください。

市長　昨日の参議院の予算委員会で、議員が高山市のファミリーサポート事業のことについて言及してみえました。国も同じように習って実施してはどうかと話をされていまして驚きましたので情報提供させていただきます。

子育て支援課長　ファミリーサポート事業については利用者が非常に多いです。コロナ禍で外に出られないなど、家庭の中で孤独感を感じられる親も多かったと思いますし、委員がおっしゃられたとおり家族の形が変わってきていることもあると思います。相談内容については、地域にママ友がいない、実家のお母さんがいない、どこに遊びに行ったらいいのかというお話や、どのように子どもに接したら良いのかなど、中には深刻なお話もあります。そういった内容については、委託事業者から市へ情報を共有いただき、一緒になって考えていく仕組みで取り組んでいるところです。

野崎委員　ちょっとしたことだからと聞いていいのかためらうことが重なってしまうと、子どもに対しての虐待に繋がる心配もあるため、本当にちょっとしたことでいいんですよと間口を広げたり、相談員も何でも話してもらっていいですよという形で受けてくださるとありがたいと思います。この事業はこれからも継続してほしいと思います。

市民保健部長　伴走型支援については、国が全国的に始める事業になります。その中で、妊娠時の面談については市ではこれまでも行ってきましたが、これからは８ヶ月のアンケートが追加されます。出産時の面談については、こんにちは赤ちゃん訪問の際に一緒に実施します。これも市でこれまで実施してきたものです。それらの事業を実施する中で、健康推進課や子育て支援課が情報を共有しながら、それぞれのサービスや支援に繋げていくことを狙いとしています。今までも方法を検討しながら行ってきましたが、まずは情報を共有して、皆が対応できるような形をとっていくことが大事だと考えています。現在妊娠中の方や出産された方へのアンケートも返ってきていますので、それらも共有しながら進めていきたいと考えています。

野崎委員　いくつかの部署で情報を共有していただくことで、赤ちゃんのときから幼稚園、保育園、そして学校という子ども１人をトータルに見てもらえると思い安心しました。

市長　子育ての環境は、不登校の方や障がいをお持ちの方など多様になっています。それぞれの事情や思いに対してどのように対応したら良いのかを日々悩んでいます。現在、民間の団体や事業所で様々な取組みがなされています。それらの方々は必ずしも市の支援がなくても事業に取り組んでみえる方もいらっしゃいますが、そういった方々と手を組んで、一緒に実施する方法が現実的ではないかと、市長に就任してから様々な方とお話をさせていただいた中で思いました。制度設計が難しい部分もあると思いますが、どのようなことが実現できるかを、協議をしながら状況に応じた施策を展開したいと考えています。

桑谷委員　１１ページの６９番の大学連携の推進について、前回も話しましたが、昨年私が経営している事業所と市内の他の事業者さんと一緒に名古屋経済大学の研究に対して協力し、１２月に開催された飛騨高山学会で成果発表がありました。大学生の行動を見てきた中で、最初の入口は良くて、最終的なところでは少し違うと感じた部分はあったにしても、そのような活動をしていただいたことはありがたいことだと思いました。学会の内容は自然であったり文化歴史であったりと様々でしたが、地域との連携がうまくいっていないと感じました。学生たちが様々なところに行き調べてきた結果の発表はありましたが、地域の表に出ている部分が少ないと感じました。テレビ局から取材があり、記者の方から「メリットはありますか？」と聞かれましたが、「ボランティアです。」と答えました。ボランティアとしてお手伝いすることで十分ですが、結果が表に出るような活動をすることが大事だと思います。そのようなことについて、大学側に対してこのようなことができますと提案していくと良いと思います。例えば、高山には木工家具メーカーが多いため、家具のデザインについて大学生が考えたものを、家具メーカーで作るということができますといった提案を積極的にしていくと、更に身になるものができていくのではないかと感じました。大学連携センターがそのような仕組みのパッケージを作っても良いと思います。３月に入って名古屋経済大学から私にメールがあり、今年もやりたいという話がありました。内容をブラッシュアップして試行錯誤していけば、更に良いものができていくと思います。広がりを作った方が良いと思いますし、その役目として、大学連

携センターがあると思っていますので、その辺の強化をお願いします。そこは予算がかかるところではなく、担当者がいかに考えるかだと思いますのでお願いします。

清水課長　大学連携センターで取り組んできた内容が地域や事業者の方などその次に繋がるような取組みになっているかという点については弱いところがあり、課題であると思っています。連携センターにおいて、委員が話されたパッケージという形で、各大学に高山をフィールドにすることのメリットを感じてもらえるような発信を強化していく必要があるのではないかと思っています。来年度の取組みにおいては、市が大学連携センターを通してタイアップする事業の中で、最初の段階から事業者の方にも一緒に入ってもらうプロジェクトを計画していますので、その後の成果に繋がるような取組みというところを意識して向かっていきたいと思います。

市長　私自身は大学連携センターの理事をやっており様々な取組みを伺っていますが、委員がおっしゃったように、実際に大学に来ていただき、市内をフィールドとして学んで帰っていただくだけでは意味がないように思いますので、大学側にもメリットがあり、地域に落とし込んでいけるような取組みとしていく、そのようなところが必要だと思います。

白田委員　１１ページ６８番の高校連携について、長瀬委員が言われたとおり、特別支援学校との関わりを各課で持っていただけるとありがたいと強く思いました。
そして、全体的なところで、３ページと４ページの「妊娠期から子どもが自立するまで継続して支えること」に対する取組みについて、新規や拡充が多く含まれていて妊婦さんにとっても心強いと思いますが、これをどのように発信していくのでしょうか。必要な人に確実に届けるようにしてほしいです。予算を付けて実施しても支援をしてほしい人に届かないということが一番もったいないので、そこは強くお願いしたいと思います。また同様に、１１ページと１２ページの「若者が暮らし働きたくなる魅力的なまちにすること」に対する取組みについても、新規や拡充事業が多いので、若者にとっては様々なチャンスがあると思うので、こういったことも若者にどれだけでも届くようにしてほしいと思います。

市民保健部長　妊娠された方に対してどのように伝えるかということについてはとても難しい課題だと思っています。というのは、妊娠を喜ばれて医者にかかって母子手帳をもらいに来る方は、問題ないかと思いますが、そこに至らない方への支援であると思っています。特にお金がなくて医者にかかることができなかったり、ためらってみえる方への支援があるということを、該当される方に伝えることはとても難しいと思いますが、全国的に実施していく話ですので、若い方も含めて取組みが広がっていくように、折に触れて周知をしていきたいと考えております。

丸山委員　全体について、出産や乳幼児を育てる部分に対して新規事業が手厚く組まれたことが良いことだと思います。４ページ１９番の新規事業の第５次高山市子どもにやさしいまちづくり計画について、「ニーズ調査および子育て家庭生活実態調査」をされるとありますが、実態を調査するということが大事であると思っています。ニーズを拾い上げると何をしたら良いのかが明らかになりますし、現在子育てをしている方々が何を必要としているかを市に伝えることにもなるため、調査をしていただくことは良いことだと思いました。
エピソードをひとつ話したいと思います。１２ページの「若者の創業や就職を支援」に関わることですが、私の店に来た帰省した女の子とお母さんがいらっしゃったので話をしたところ、女の子は

あまり帰ってこなくて、年に１回ぐらいしか帰省しないとのことで、現在は東京で働いていると話してみえました。服飾関係のデザインか何かをされていたかと思いますが、高山でそういう仕事はできないのかと聞いたところ、自分で会社を起こしているわけではなく、雇われて働いているし、高山には仕事がないので帰って来られないと言っていました。私から彼女に、今は自分で創業することもできるし、高山市ではサポートもしていると話しましたが、現在生活している場所に友達もいるし、大学時代の友達も関東にいるし今更帰って来られないと言われました。それらの話を聞いて、彼女を含め高山を出ていった子たちは人の繋がりを大事にしているのではないかと感じました。そこで考えたのは、出ていった子どもたちは帰ってくるという発想でいましたが、逆に、高校を卒業して就職なり仕事をしながら大学を通信でやるなど、人間関係を高山で保ったまま、何かを学びながらキャリアアップして仕事に繋げる、またやりたいことができるという環境を整えることはどうだろうかと考えました。中学・高校で将来何をやりたいかを考えるにあたって、今の高山で子どもたちがやりたい仕事は何なのか、やってみたい仕事があるのかというニーズ調査を、子育てするお母さんたちや次の高山を担ってほしいと思う年代の子たちに対して実施すると、どんな仕事を創設していけば良いのか、子どもたちがやりたい仕事は高山でできるのかといったところが見えてくるのではないかと思いました。出て行った人が戻ってくるということばかりに気が向いていましたが、逆に出て行かずにこのままできる方法を考えるという手もあるのではないかと思います。小中学校で郷土教育を行い、郷土愛を育んでいるのに、出ていく前提で学びを高めていくのはおかしいことかもしれないと、その学びを高めた状態でそのまま高山にいてくれればもっと良いのではないかという気持ちになりました。今回の資料において、若者の創業支援についての拡充や新規事業がありますので、その予算をうまく使って吸い上げを出来たら良いと考えました。

商工労働部長　創業支援については、来年度から３５歳未満の方の補助率を３分の１から３分の２に引き上げて、より創業を後押ししようとするものです。他にも紹介させていただくと、１３ページ８４番の新規事業の、若者が進学等を契機に地元を離れる前に地域の事業者に対する理解や地域の愛着を育む機会を創出する職場体験事業について、地域のお仕事発見隊の方と連携して来年度実施します。小さい頃から仕事や職業に対する意識を醸成していくということや、今委員がおっしゃられたニーズ調査ということも含めて、来年度以降取組みを進めていきたいと思います。

市長　私の思いをお話しすると、第１にここに住んでいる人を意識して様々な施策を展開していきたいと思っています。これまではどちらかというと、高山市に来てくださいという、若者だけではなくて、移住や観光も同じような側面がありますが、外から来ていただくことに大きなエネルギーを使ってきました。委員からお話があったように、様々な事情や理由により高山市に戻って来られない方もいらっしゃると思いますので、戻ってきてもらうことに闇雲にエネルギーを使うというよりも、外におられる方たちを大切にすることは変わりませんが、住んでいる若者がワクワクするような施策を行うことで、市外にいる若者たちが自ら戻ってみようと思ったり、住んでいる若者が市外の若者に対してこっちに来たらと誘うようなことにもなるのではないかと思っています。

桑谷委員　１７ページ１０６番の金森長近のマンガを学校授業等で活用に向けて製作することについて、郷土教育という観点で非常に重要だと思っていますし、教育だけじゃなくて観光にとっても大事だと思います。２月に輪之内町で、丸茂兼利という関ケ原の戦いの前哨戦である福束の戦いを生き抜いた武将のイベントがあり、半日のイベントに２,０００人から３,０００人が輪之内町を訪れたそうで、方法次第で多くの方に来てもらうことが可能だということがわかります。高山市はコンテンツが多

いため、どれを選択しどのように使うか難しい面もあると思いますが、コンテンツの中から郷土の武将である金森長近をフューチャーして、子どもたちに功績や偉業を伝えて、それを周りに広げていくという使い方があると思います。マンガはわかりやすいツールの一つだと思いますので、学校の授業等で使うだけにとどまらず、それを他の方面にも広げてもらいたいと思っています。マンガを誰に書いてもらうかということについて、地元出身の漫画家等いろいろと考えてみえるかと思いますが、個人的に繋がり等もありますのでいくらでも協力したいと思いますし、情報提供もしたいと思います。マンガ制作というのは一般の人が考えているよりも非常に手間がかかり労力がかかるので、なかなか思い通りに進まないということが始めてみると出てくると思いますので、その辺を見据えた上で進めてほしいと思います。

牛丸課長　金森長近の事業については、令和６年度に金森長近生誕５００年を迎えるということもあり現在取り組んでいるものです。今後様々な活用が期待できるものであると考えており、委員会等を立ち上げ、様々な方のご意見を伺いながらシナリオに反映させたいと考えていますし、完成後はデータ化をして活用する等、多くの方に活用していただけるように取り組んでいきたいと思っています。

市長　マンガを制作することは一つの目標ではありますが、その過程やその後についても意識しながら進めてほしいと思います。

白田委員　７ページ３８番について、町内会等が行う児童遊園地の整備に対する助成とありますが、久々野診療所の移築に伴い、診療所の屋上に公園を作るという話があり、その後屋上に公園は作らないことになったと思いますが、別の場所に公園を作るという代わりの案はあるのでしょうか。公園が少なく子どもたちも活用をしていたところだったため、できれば代替案があるとうれしいです。

市民保健部長　南高山地域医療センターの整備にあたっては、様々な検討をする中で、久々野支所の中にあるつどいの広場と連動して使われるというお話を伺いましたので、敷地の中にスペースを作り、そこで対応したいと考えています。以前の公園の広さを確保することは難しいのですが、一角に公園のようなものをフェンスで囲うような形で設けたいと思っていますし、支所側からは自由通路を設け、つどいの広場等と連携して対応できるようにしたいと考えています。

白田委員　引き続き若いお母さんをはじめ地域の方に分かるような説明をお願いします。

市民保健部長　公園の件については、説明会のときに利用者の方からお話があり、当初予定はありませんでしたが対応することとしました。説明会に来られなかった方もいらっしゃると思うので、つどいの広場を利用されている方にお知らせできるような方法を支所とも相談し考えていきたいと思います。

市長　他にご意見等ございますでしょうか。それでは次の議題に移らせていただきます。

市長　それでは次の議題２「聴覚障がいのある幼児への支援について」、事務局から説明をお願いします。

子育て支援課長　（資料２を説明）

市長　ただいまの内容について、今回これを議題とした趣旨は何ですか。

浅野課長　　県の取組みになりますが、飛騨地域の現状として難聴児支援に関して理解が低いということを、難聴児支援部会や県の会議等で言われているため、それらの点を踏まえて、皆さんに知っていただきたいと思い紹介させていただきました。

教育長　　保護者からの意見の中に、職員の定期異動について触れられているところがありましたが、その点についてもう少し詳しく教えてください。

子育て支援課長　学校の先生を信頼していないという話ではないということが前提としてありますが、学校の先生も行政の職員もそうですが、２年、３年で異動してしまうため、保護者からすると、寄り添ってくれる人が次から次へと変わってしまう。そのような実情を踏まえて、行政において家庭や子どもたちに寄り添える支援者として誰かいないか、それが他市の例では保健師であったということを話したかったと聞いています。

教育長　　継続的な支援をどう構築するかということは課題に思っているため、今後も様々な意見を聞かせていただきたいと思います。研修も含めて、どのように繋げていくかというところは大事な点だと思っています。

浅野課長　　県の難聴児支援の検討会において、支援の専門性を高めていくことが大きな課題として挙げられました。教員の人事異動もありますし、研修を行うことも提案されましたが、時間がかかることもあり、そのような部分も重層的に進めていく必要があるということが議論されていました。

野崎委員　　重度心身障がいや人工呼吸器を付けなければならないといった、リハビリが必要な飛騨の子どもたちの中で、岐阜の医療センターへ通っている子どもは多いです。地域の病院などにおいて障がい児へのリハビリも行っていますが、聴覚障がいへの支援については分かりづらい部分があります。程度も様々であることから、手話が必要であるとか、補聴器で大丈夫であるとか、それぞれの子どもによって適切な支援や対応があると思います。そのため、耳鼻科の先生など専門家の意見を伺いながら、個々の難聴のレベルがどのくらいで、どのように対応すると子どもはわかりやすいのかといったことを教えていただけると良いと思います。学校を訪問すると、難聴の子どもたちがタブレットを使いながら一生懸命勉強していますが、それぞれの子どもの難聴レベルや適切な対応方法について、専門的なことも含め学校と連携されると良いと思います。子どもたちも勉強に前向きになると思います。難聴障がいのある幼児への支援を小学校へ結びつけるために、幼児からどのように対応したら良いのか、難聴が改善する傾向が予測できるといったことを、一人ひとりに寄り添っていただき、専門的な科学的根拠を共有していただけるような取組みとなると良いと思いました。

白田委員　　現在は、難聴を指摘された場合に、難聴支援センターに行くような決まった流れはあるのでしょうか。

子育て支援課長　　スクリーニングという検査を行い、難聴児を早くに発見する取組みがなされています。難聴児のスクリーニング検査の精度については、ほぼ 100％に近い割合になります。平成 31 年に 587 人が検査を受けて陽性が 5 人という結果でした。陽性と診断された子どもたちを、その後いかに支援に繋げていくかということについては、市内の病院の耳鼻科の先生等と連携しながら進めていると

ころです。途切れない支援について力を入れていかなければならないと思っています。

白田委員　子ども自身は検査で聴力が悪いと診断されても、まだ幼いなのでわからないと思います。ショックを受けるのは家族や親なので、そこへのフォローを手厚くしていただけると親は頑張れると思います。現在、難聴の子の幼児教室もあり心強いと思います。同じ難聴児を持つお母さんたちがコミュニケーションを取れると本当に心強いと思うので、交流会のようなことも進めていただければありがたいです。

子育て支援課長　保護者のネットワークについては、幼児教室を通して行っていますし、難聴児支援部会に保護者の方に参加いただき、様々な意見交流も行っています。また、行政においても健康推進課の保健師に、難聴についての勉強会を行い専門性を高める取組みも行っています。難聴児支援センターには言語聴覚士といった専門員もいますので、連携して取り組んでいきたいと思っています。

市長　他にご意見等ございますでしょうか。それでは次の議題に移らせていただきます。

市長　それでは次の議題３「部活動の地域移行について」、事務局から説明をお願いします。

学校教育課職員　（資料３を説明）

桑谷委員　既に一部地域移行が始まっている、柔道、スキー、ハンドボール、剣道、野球のこれらについて、生徒や保護者の反応はどうでしょうか。

学校教育課職員　先日軟式野球の練習を見に行った際は、子どもたちは楽しく練習しており、保護者の方も保護者会を何回も重ねて、どのように進めていくと良いかを話し合いながら進めていると聞きました。問題点も多く出てきており、話し合いを進めていきながら解決していると聞きました。3 年間は推進期間となりますので、その中で課題を話し合いながら解決していきたいという話を聞いています。

教育長　例えば、学校に野球部がない中学生が、野球を楽しむことができるチャンスが生まれた、また、剣道では、団体が組めないチームが団体戦に参加することができるようになったという成果もあり、その点は良いことだと思います。ただし、移動や会場の確保等、今後話し合いなどにより解決していかなければならない問題もあります。

桑谷委員　保護者の負担について、どこまで考慮するかといった点は課題だと思います。楽器等、金額的に高価な物等はわかりますが、全て至れり尽くせりにするのかということについて考えなければならないと思います。場所の予約について、中学生の部活を優遇することを前提に考えているのか、一般の方と同じ方法で確保していくのか、現時点での考えがあれば教えてください。

学校教育課長　現時点において決まっていません。現在様々な事柄をルール化していく段階に入っていますので、関係者等と調整しながら明らかにしていきたいと思っています。

市長　始まったところもあればまだのところもあります。活動の内容や形態も様々で大変かと思いますが進めていってください。

市長　　次に、議題（４）に移らせていただきます。個人情報を含む内容ですので、「地方教育行政の組織および運営に関する法律」第１条の４第６項ただし書きの規定に基づき、これより会議を非公開としたいと思いますが、これに異議ありませんか。

各委員　　（意義なし）

市長　　異議なしと認め、そのようにさせていただきます。

＊＊
（個人情報保護のための非公開部分）
＊＊

市長　　ただいまより、公開に切り替えさせていただきます。
以上で、本日の議題は全て終了しました。その他に皆さまより、何かありましたら承りますが、よろしいでしょうか。

各委員　　（なし）

市長　　それでは、進行を事務局に戻します。

企画部長　以上をもちまして、令和４年度第２回高山市総合教育会議を終了します。